

「季論」秋号・原稿（４００字３０枚）

## 京都向日市の「憲法の心・１００字メッセージ」

望田幸男（もちだ・ゆきお）＝１９３１年生まれ、ドイツ近現代史、同志社大学名誉教授、非核の政府を求める京都の会（代表）、著書に『グローバルに考え、ローカルに行動する』（文理閣）、『二つの戦後・二つの近代』（ミネルヴァ書房）、「ふたつの近代」（朝日選書）など。本誌編集委員。向日市在住

### はじめに

「来たぞ、召集令状や、父の電話の音がふるえていた。」これは、京都の向日市９条連絡会が取り組んだ「向日市民、憲法の心をつづる１００字メッセージ」によせられたものの一節である。「戦争をする国」における庶民が、どんなに不安におびえ、悲痛な思いを抱いていたか、短い文章のなかに凝縮されている。日本人の非戦・平和の想いの根底にある原体験ともいふべきものである。同様のものを数編、抜き書きしてみよう。

- 父は出征し戦死、母の苦労は子どもの私でも心が痛んだ。
- 父は警察に連行され、母と子どもは空襲で家を失う。
- 戦時中、母の着物は米やイモになりました。
- 灯火管制で医者に診せられずに死んでいった姉への負い目を、母は生涯もちつづけた。
- ４才のとき、配給券をもって並んだ。
- 大阪大空襲、空が真っ赤に染まるのを震えながら見ていた。
- 孫に戦争だけは体験させたくない。

私は、この「向日市民、憲法の心をつづる１００字メッセージ」の運動を、９条の会向日市連絡会で、昨年５月の憲法記念日の取り組みがすんで、秋に向けてなにをするか議論するなかで提起した。この連絡会は、向日市にある６つの小学校区それぞれの「９条の会」とともに、新婦人向日市支部と乙訓医療生活協同組合９条の会によって構成されている。この論議を始めているうちに、１０月に総選挙があり、その結果は、９条改憲をめぐっていっそう切迫した状況となった。新党「希望の党」が仕掛けた策謀は功を奏することなく終り、立憲民主党のさわやかな登場とともに、「市民と野党の連合」の大義のために

「いさぎよさ」を発揮した日本共産党の見識をきわだたせたが、とはいえ、改憲派が国会議席数の三分の二を越え、改憲発議の強行が予感させられた。向日市の場合、総選挙の比例代表の得票数でいえば、自民・公明・希望・維新の改憲派の得票総数は、約1万5000であり、これに対し立憲・共産・社民の改憲反対派の得票総数は約8000であった。私たちの運動はここをスタート点としなければならなかった。つまり国民投票で向日市において改憲を阻止する責務を果たすためには、現状の1.5倍強の得票を確保しなければならない。9条連絡会における論議は、熱気をはらみつつも多岐にわたり紛糾した。

結局、落ち着いたところは、全国に呼応して3000万署名のいっそうの推進をはかりつつ、運動の核心において9条を守り抜く思想と意識を結集する意味で、「100字メッセージ」を合せて推進しようということになった。

## 一 「他者との対話」とはどういうことなのか

### 運動のなかで学んだこと

さて、100メッセージ運動をはじめるとあって、私は、人口5万の小都市向日市で500人の応募者数の確保を提案した。実は30年ほどまえに、「非核の政府を求める京都の会」で、『ハート・オブ・ピース』という非核平和の想いを綴った100字メッセージ文集を編むことに取り組んだ経験があった。その時は全京都府的にかなり大がかりで取り組んだが、5000人の目標にたいして、結果は2000人であった。今回は人口比でいえば50分の1の向日市だけの運動なので、500人目標でも過重ではないかというのが、私の胸算用であった。だが、連絡会の議論では情勢の切迫感からの「気負い」もあり、1000人を目標とすることになった。そして応募者から500円の出版費用・掲載料の拠出をお願いし、完成した冊子1冊を贈呈するとともに、他に販価300円で広く読者を求めることにした。

こうして運動を開始したが、とたんに様々な困難が生じた。決定的なことは、予想していたこととはいえ、通常の署名や募金の活動との大きな違いに直面したことであった。署名や募金であれば、電話やビラでの依頼も功を奏することもありえるが、この運動は100字とはいえ、応募者本人が書くという自発性にまたねばならないことであった。9条や憲法に関連して、なにを、どのように100字以内で表現するかは、それなりに考え、それなりの知的労働をとまなうことであった。事務局サイドとしては、100字のマス目の原稿用紙や例文集をつくって執筆を支援したが、逆に「100字ではおさまりきれない」という苦情もよせられた。こうした諸点の困難さは予想されておったが、どう書いてもらうかもっと事前討議をかさねておくべきだったと、いまさらながら気づいたが、それは「後の祭り」であった。

こうした要請や苦情に対応することは結構、大変であった。なかには逆に戦時中の体験からはじまって、今日にいたるまでの長い人生の体験を、延々と語り出すご老体もいたか

らである。ともあれ、せいぜい5分かそこらですむ署名や募金のお願いとは大違いの事態に直面した。この種の運動形態にははじめてであった活動家の皆さんにとっては、勝手が違う想いを禁じえなかったようである。もっとも長時間の記録としては、対話は7時間に及ぶ場合もあったのだ。こうしたこともあって、運動は地域や校区によってばらつきが目立ったのも不思議ではない。

いささかあせりにも似た想いをいただいた私は、向日市をふくむ地域で発行されている「乙訓革新懇ニュース」（2017年9月15日、171号）に、一文を草し、そのなかで次のように訴えた。

いま「九条の会」向日市連絡会は、市民一人が「憲法への自分の想い」を100字で綴って、小冊子にする運動を広げつつあります。それは、どんな事態になっても安倍政権には「憲法には絶対に手をふれさせない」という気概を内外に示す運動です。またそれは、いつの日か子どもや孫たちに、「あのとき、あなたたちはどうしていたの」と問われたとき、「こんな想いで頑張ったのだよ」という姿を残すためです。それは、私たちの父母や祖父母の悔しさや悲しみを繰り返したくないからです。・・・・

また推進ニュースも幾度か発行したが、このような状況がしばし続くなかで、一条の光のように活路を開いてくれた経験談も生まれた。それは二人の年配女性のペア（一方は論客、他方は文筆を得意とするという絶好のペア）の奮闘であった。あるとき、この女性ペアのひとりと話しをする機会があった。彼女はこう語った。

「この運動をやって本当によかったです。これをやるなかで、自分のこれまでの長い活動経験はなんだったのか、と反省させられました。一筆書いてもらおうとすると、その人の生い立ちから青春時代へと至り、その人がどう生きてきたか何十年という人生の歩みそのものをまるっば聞かされ、それと対話することになりました。これまでの署名や募金の活動なんて、相手のほんの上っ面としか対話してこなかった。こんなことを自覚する機会をつくってくれたこの運動に感謝してますよ。」

この感慨の言葉は、わたしの周辺で最も頑張り屋で論法鋭い論客と目されている彼女の言葉だけに、このメッセージ運動の「いいだしっぺ」になった私にとっても、心から「やってよかった」という想いを抱かしてくれた。そして彼女たち二人の活動が「はずみ」になったのだろう、ぐんぐんメッセージ応募者が増加しはじめ、それがさらなるはげましもなって、全体的に前進の波が見えだしてきた。

当初、メッセージ応募の締め切り日を、2017年10月25日としていたが、総選挙との関係もあって最終的には18年1月25日に設定しなおして取り組んだ。

## 二 完成！ 640人が寄稿！

### 京都新聞4段組み・カラー写真で活動と冊子を紹介

ともあれ、こうして640人の寄稿数に達した時点で、運動は終了させ、さっそく編集にかかった。まず本名・仮名・学区にかかわらず、氏名の50音図順に配列した。これは各校区9条の会の分担責任で、パソコンに打ち込む奉仕作業によって遂行された。そして向日市在住の画家吉川泰史氏が、折にふれて書きとどめていた向日市の街並み風景画を、表紙絵と裏表紙絵に飾り、10数枚を挿絵風に配列することにした。ちなみに、この130ページほどの冊子は出来上がると、なかなかの評判を博したが、その第一印象は「絵がいい」という声をしばしば耳にした。そこには小都市の向日市が、「ビルはすくないけれど、住みよい風情ある街並みであってほしい」という吉川さんと住民たちが共有する願いが、寂びのある筆致で描かれていたからだろう。

それからもうひとつ、編集上の工夫を凝らしたことがある。640通のメッセージを氏名50音図順に配列してみたとき、数ページにひとつの吉川さんの挿絵があるものの、毎ページが小さな活字の羅列でおおわれているのは、なんとも芸がなく味気ない感があった。そんなとき編集のベテランとして作業の中心にいた石沢春彦さんが、毎ページに太字で小見出しを記入することを思いついた。しかも、その文言はそのページのメッセージ文章のなかから拾うという作業だ。「なかなかのアイデアだ」と思った。だが彼は勤務先の仕事の多忙のうえ、健康を害していたこともあって、その小見出し作業はあまり進行しておらず、大半が空白のままであった。その空白を見たとき、私は、「だれか、このあとのボールをもって走ってくれ！」と彼が叫んでいるように感じられた。その夜、私は深更までかけて小見出しの選定・作成を完成した。これによって冊子をひもどいたとき、寄稿者たちのさまざまな想いのポイントが、太字で毎ページに踊っている感を抱かせる効果をもった。居住地における活動の際にはしばしば生じるこの種のトラブルや故障は、気づいた者が、とっさに穴をうめることで進行していく。こんな助け合いも居住地活動の楽しさだろう。

ともあれ、こうして冊子『向日市民 憲法の心をつづる』は完成した。B5版135ページだ。落ち着いたただずまいの街並みを描いた吉川泰史さんの表紙絵は、冊子に風情ある気品をそえていた。1500部を作成し、寄稿者に各1部を贈呈し、残部は1部300円で頒布することにした。

次いで「連絡会」は新聞記者会見を計画した。だが小都市向日市には大新聞の支局にあたるものはない。ただひとつ地元紙の京都新聞の連絡事務所があるだけであった。当日は、京都新聞以外では、京都民報社と赤旗関西総局が出席してくれた。

5月3日付け『京都新聞』朝刊には驚かされた。4段組みのスペースに、冊子を手に掲げた事務局代表の新堀悟史さんの大写しの顔写真がカラーで掲載され、タイトルには「100字メッセージ+640人」「憲法、平和考えて」「乙訓の市民団体が文集、現代史の証言

に」が大きく踊った。新堀さんは会う人ごとに「市長選挙に出るのですか」と冷やかされたそうだ。

5月20日付け『京都民報』はまた異なって筆致で見事に要約されていた。とりわけ大見出しに「「来たぞ、召集令状や」父の電話の音が震えていた」を掲げていたのは秀逸であった。本リポートの冒頭でもこの一行を紹介し論じたが、この言葉に冊子の核心があると私も総括していたからだ。つまり日本人の非戦・平和の意識の根底には戦時中の悲しみ・苦しみが牢固として横たわっており、そことが孫や子に伝えられ、今日、安倍改憲の策動に対する反撃のバネとなっているからだ。このことを、この言葉は凝集的に表現しているからである。小見出し130ほどのなかから、この一節を大見出しに掲げた記者センスは見事といってよいだろう。

京都新聞や京都民報の紹介記事の効果もあっただろう、6月末現在で1500部印刷した冊子は、640人の執筆者への贈呈をふくめて、もはや事務局には残部は100部を切っている。増刷するかどうか、また頭痛の種になりそうだ。

### 三 「100字メッセージ」640人の合唱 人生体験から発する非戦・憲法賛歌の叙事詩

こうして昨年5月に思い立ってはじまった「メッセージ運動」も、ほぼ終結した。最後に640筆の「100字メッセージ」の合唱を、あらためて全体的に整理・分類してみたい。そこに戦時・戦後における日本人の国民的体験にもとづく非戦・平和意識の内実を垣間見ることができるであろう。

全体的な印象としては、わずか100字ほどの文章だけれども、そこにはその人が歩んできた人生についての語りがあることは、すでに随所で指摘してきたが、この640筆を何度か読み返しているなかで、私の脳裏に以下のような分類が点滅してきた。それは、三つの時期に分けてそれぞれの特徴を整理することができる。すなわち戦時中の体験に根差したものと、それから戦後体験に関連したものに大別し、後者の戦後体験を、安倍改憲が表面化した時期とそれ以前の時期にわけることができる。

- (1) すなわち第一の戦時に関して、悲しい辛い体験が語られつつ、言外にそれらを二度とくりかえすまいとう願いをこめて、日本人の非戦・平和の意識の土台が形成されている。
- (2) 第二の時期には、戦後の解放感とともに、平和と人権の憲法への賛歌が奏でられている。いわば戦時期におけるネガティブな非戦・平和の希求が、ここにはポジティブな確信に深められている様相が浮かぶ。
- (3) そして最後の第三の時期には安倍改憲への危機感が語られると同時に、現憲法へ

のさまざまな非難・攻撃を浴びるなかで、逆に現憲法の価値の再認識、そして新たな憲法意識の目覚めが浮かび上がっている。たとえば、護憲の運動が憲法の条文を守ることに終始してきたなかで、改憲派は憲法の現実を着実に変えてきたこと（自衛隊の増強など）への反省も語られている。総じて安倍改憲の陽動によって、平和と人権の憲法意識がさらに鍛え直されている様相がうかがわれる。

このような三つの時期にわけて、それぞれの特徴をもった人生体験の叙事詩を見ることができる。しかも、これら三つの時期の体験が重ねられることによって、今日の日本における非戦・平和・人権の意識が形成されているのだというのが、この文集をくり返し通読して到達した印象である。では、以上の指摘を「関連する章句」を抜き書きしながら具体的に見ていきたい。

(1) 戦中体験によせて：くりかえすまい「戦中の悲哀と苦しみ」（この部分は、本稿冒頭に引用したものと重複している部分もある。）

○ 軍隊・戦場・戦死に関連して

- \* 「来たぞ、召集令状や」父の電話の音が震えていた。
- \* 三才のとき、父の戦死、父の愛情を知らずに育った。
- \* 父は出征し戦死、母の苦労は子どもの私でも心が痛んだ。
- \* お国のためと言って出征した兄が、生きて帰ってきたら喜んだ母。
- \* 「人殺しはいやなので、当たらないように銃を撃った」と父の話。

○ 空襲・灯火管制

- \* 父は警察に連行され、母と子どもは空襲で家を失う。
- \* 灯火管制で医者に診せられずに死んだ姉への負い目を、母は生涯持ち続けた
- \* 大阪大空襲、空が真っ赤に染まるのを震えながら見ていた。

○ 食糧難

- \* 戦時中、母の着物は米やイモになりました。
- \* 4才の時、配給券をもって並んだ。

○ 言論・思想の統制

- \* 戦争中、「源氏物語」も「平家物語」も禁書だった。

(2) 戦後の解放感、平和と人権尊重の憲法への賛歌

○ 戦後の解放感

- \* 防空壕にはいらなくてもよくなった。ほっとした。
- \* 小6で憲法に出会った。日本は戦争しないんだ。嬉しかった。

○ 平和と人権尊重の憲法への賛歌

- \* 府庁のたれまく「憲法をくらしのなかに」
- \* 生活を一変させた文部省発行『新しい憲法の話』

- \*向日市に着任の先生挨拶「憲法と教育基本法に則り・・・平和日本を築かん」
- \*私は9月生れ、9条守る。

### (3) 安倍改憲への危機感、新たな憲法意識の目覚め

#### 0 安倍改憲への危機意識

- \*子や孫は戦場には行かせない。
- \*孫の運動会、この子たちの笑顔を消してはならない。
- \*戦争嫌いやし！ 母は怖い顔でテレビの「コンバット」を消す。
- \*平和憲法70年、他国を侵略しなかった。
- \*四つで敗戦、それから喜寿の今まで日本は戦争をしていない。
- \*希望のプレゼント=平和憲法、この宝を奪おうとするのは誰だ！

#### 0 新たな憲法意識の目覚め

- \*どうしてみんな仲良くできないの、と子らはつぶやく。
- \*心を馳せる大切な友が海外にもいる。
- \*「平和でこそ登山も楽しめる」山を愛する者。
- \*憲法に合わせて現実を変えていこう。
- \*憲法を変えるより、憲法のなかみを実現させることが大事。
- \*憲法9条を世界遺産に！
- \*向日市に憲法9条の条文を刻んだ碑を建ててほしい。
- \*自衛隊も国民だ、平和の裡に生きる権利がある。

以上が640人の憲法メッセージの要約であり、エッセンスである。幾度か通読した私は、ここには戦中・戦後のそれぞれの人生体験から発した非戦・憲法賛歌の叙事詩ともいふべきものがあると感じ入った。安倍改憲は、この国民の心と身体に深く根差した非戦・平和意識をまさに逆なでするものであることが浮き彫りされている。

こうした指摘は、いわれるまでもないことかもしれない。しかし、こうしたことが個々の体験・表現の集積、つまり集団意識として確認できたことは、着目すべきだろうし、「メッセージ運動」の大きなメリットだと強調していただろう。いわば現代における日本人の非戦平和意識の記憶の歴史にとどめられるべきことである。

この冊子をしばらく会っていないかつての教え子に送った。ほどなく一通のメールが届いた。そこには冊子への礼状とともに、自分の父が戦後よく語った話が記されていた。父は出征し、負傷して片目を失い帰国したが、「両親や弟妹のためと思い、戦場へ行ったが、戦後になって、戦争に良いも悪いもないことが初めてわかった」と、よく話していたという。この一文を読んで、私たちの冊子を読んでもくれた人々のなかに、同様の感慨を呼び起こさせ、それを、またこのように他者に伝達していくのか、と思った。わたしたちの冊子が投じた一石が、波紋を広げていく様を見る想いがした。

## おわりに

最後に一地方都市における「憲法の心をつづる100字メッセージ運動」の数か月にわたる歩みを語り終えるにあたり、「地域運動」に関する若干の感慨を列記しておきたい。

第一につくづく感じたことの一つは、こうした運動を開始するに先立って、さまざまな角度から事前の論議をつくすことの大切さであった。運動のさなかに、この点もあの点も事前討議に付しておくべきだったと思うことは多々あった。だが、運動が開始されてからの軌道修正は混乱と戸惑いを産むだけであった。しかし、だからといって運動のさなかに提起された問題を無視することも、それはそれで違和感や疎外感を生じさせる。きめこまかな事前討議の大切さを改めて痛感させられた。

もう一つの感慨は、居住地におけるこの種の活動は、彼我が二手に分かれた陣地戦とは大きく違っていることだ。そこでは仲間同士が背中合わせになって、怒鳴りあいながら動き回る白兵戦そのものだ。ここでは味方がパスミスしたり、守備の「穴」に気づかなかつたりした場合には、その責任の所在を追及しあうのではなく、気づいた者がミスをカバーしたり、自らが穴を埋めるべく身を挺することだ。そうでなければ居住地における白兵戦はなりたたない。すくなくとも前進できない。大局的には志を同じくしているなかにあつてそうなのだから、政党・政派を異にした者同士の協力協同の道は、まだまだ創意工夫と気配りの積み重ねを必要とするわけだ。